
近くて遠い世界のお話

Akatuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近くて遠い世界のお話

【Nコード】

N6954X

【作者名】

Akatuki

【あらすじ】

これは、在るかもしれない世界のお話。

プログラマー1(前書き)

初投稿です。とりあえずどうぞ。

ブローグー——

——雨が降っている。
空が泣くかのように。

かつて、人々が暮らしていたその場所は、凄惨という言葉が当て嵌まってしまふ光景へと変わり果てていた。
家という家はかろうじて形を残しているのを除き、瓦礫、残骸へと形を変えている。

住人達だったものは、辺り一面に散らばり、物言わぬ姿となっていた。

空は分厚い雲に覆われ、土砂降りの雨が大地に降り注ぎ、全てを、事実を洗い流すかののように、降り続けていく。

——ガタツ——。

すると瓦礫と瓦礫の間から、息が絶え絶えの、線が細く体中が泥に塗れた少年が這い出てきた。

少年は弱々しい足付きで立つと、今にも疲労と眠気で閉じてしまひそうな瞳で周囲を見渡した。

「
」

少年は目を見開いた。

開かれた口からは、言葉に、音にすらならない何かが無れ出た。

頭が働くのを放棄し、少年はその場から動く事が出来なくなってしまう。

しかし、雨はそんな少年を気に留める事はしない。

雨粒は容赦無く少年に降りかかっていく。

「 あ 」

しばらく、雨に打たれ続けていた少年は、小さく音を漏らすと、視線の先へふらふらと歩いていった。

血と雨で泥濘んだ地面に足を取られながら歩いていく。

そして目的の場所に着くと、そこには少年よりも年下の少女の遺体があった。

その少女は少年を兄と慕っていた内の一人であった。

少年は地面に座り、体の下に手を差し込んで少女を抱き上げた。

すると、少女の腕がボロツと崩れ落ちた。

「 え 」

少年がそれを理解しようとする前に、しょうじよの体は首と胴体だけを残して灰となり、雨に流されて形を失った。

「 ああ 」

少年は理解した。

目の前の事象を。

少年は思い出した。

何が、集落を、家族を、目の前の少女を変わり果てさせたのか。理解した。思い出した。

働く事を放棄していた頭が急速に活動を始める。

理解した。思い出した。

ブローグー1 (後書き)

初めてのため、修正入ると思います。

更新は不定期です。

では、またお会いしましょう。

プロローグ――2（前書き）

プロローグ二話目。どうぞ。

プロローグ――2

どうしてこんな事になっただらう。

少女の頭の中をそれだけが占めていた。
それ以外を考える余裕少女には無かった。

「……イン……ライント！」

朧げな、途絶えそうな意識の中を漂う少女を、聞き慣れた声が呼び掛ける。

少女はゆつくりと、声がする方向へ顔を向けた。

「お、母さ……ん？お姉……ち……ゃん？」

「無事、みたいね」

「よかつたあ」

そこには、安堵の表情を浮かべた少女の母親と姉がいた。二人の顔を視界に納めると、少女はぼんやりとしたまま深い安心感を抱く。

だが、今自分と二人の状況を上手く理解出来ない。

少女が母に問い掛けようと口を開く。

しかし、母はそれを遮る様に話しはじめた。

「よく聞きなさい。ライン……今から二人をミッドチルダに転移させるわ」

「……………ふえ？」

「ミッドチルダに着いたら管理局に行きなさい。そこで私の名前を出してリンディに話を通してもらうこと。リンディなら必ず力になってくれるから」

「待って、どういう事、一体なんなのさ！？何で、何で」

少女は母に説明を求める。

だが、母は少女から視線を外すと、隣にいる少女の姉へ言う。

「……………ラインをお願いね」

「任せて。ラインは絶対私が守るから……………お母さん」

「……………ええ」

母は姉の言葉に微笑むと、立ち上がり、その身一つで、魔法を行使していく。

すると、少女と姉の周囲を紫色をした幾何学模様の円が囲い、まばゆく発光する。

「待って、待ってってば！！？」

少女は何事か理解出来ず、ただ、母が遠くに行ってしまうことは察して、手を伸ばす。

それを、姉は少女の体を抱きしめて止める。

「お姉ちゃん、何で！？」

「ライン。ダメだよ」

「でもっ！……」

自身を止める姉に対する抗議は、姉の頬を流れる涙を見て霧散してしまった。

そのやり取りの間にも、魔法陣の輝きは強まっていく。

「……二人とも、約束して」

震える少女二人に、母は場にそぐわない柔らかな笑みで言う。

「下を向かないで、前を向いて生きて。幸せになってね」

「「お母さん……」」

そして、ついに輝きが最高潮に達して――

「愛してるわ。ライン、アリシア。私の大事な娘達」

その言葉が聞こえた瞬間、少女達の意識は暗転した。

自身の娘達を見送った女性は、表情を引き締めると、後ろを振り返り言った。

「出てきたらどうかしら」

すると、物陰から異常な白さの布を全身に纏った何者かがスーッと滑る様に姿を現した。

女性はその白布を視界に入れると、キッと睨みつける。

「……貴方の目的は大体予想が付く。けど残念ね。もつどこにも何も無いわ」

女性のその言葉を聞いた白布は、カタツと小首を傾げると、周囲に複数の幾何学模様を浮かべた。女性はその様子を見て、次の展開が予想出来た。

しかし、女性には今までの攻防、そして先程の転移によって魔力の余力が無い。

「ねえ、貴方は知っているかしら」

だから、せめてもの抵抗として、女性は口を開いた。

「因果応報って言葉を」

女性が言い終わると同時に、幾何学模様から光が溢れ、辺りを染め上げた。

数瞬の後、光が収まると、その場所には女性の姿も、白布の姿も見えなかった。

プロローグー2 (後書き)

解り難かったと思います。

修正入ると思われまますのでその時はご了承を。

あと一つプロローグがあります。では、またいずれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6954x/>

近くて遠い世界のお話

2011年10月19日01時04分発行